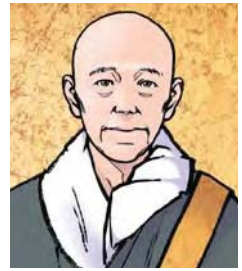
佛立開導日扇聖人物語 第13回



明治二年（一八六九）一月十日、数名のお弟子とともに「宥清寺」にお入りになられた開導聖人。この宥清寺は、やがて本門佛立講（宗）の根本道場（最も重要で中心となるお寺）として大きく発展して行ったんだ。でも、その発展と同時に多くの苦難が開導聖人を襲ったんだ。今回は、開導聖人の【ご法難】についてのお話をするね。

相次ぐご法難

開導聖人が宥清寺に入られると、これまで以上に京都の町を中心に御題目のご信者が増えていったんだ。

でもこの頃、開導聖人の身の上にまた【法難】（仏さまの教を弘める者を、追い詰めたり、苦しめたりすること）が起こり始めたんだ。

京都の西七条方面で、本門佛立講に入信（信者になること）する人が増えたために、「このままではご信者や患者を取られる」と、この地方の僧侶、神官（神社に仕える人）、山伏（山や野をめぐり歩いて修行する人）、お医者さんが協力して、『大矢先生』と住人から尊敬されていた儒者（儒教〈中国の教え〉を学び教える者）を代表者として、開導聖人を「キリスト教を弘めて、人々を迷わす悪い奴」と、京都府にウソの訴え（裁判所に申し出る）を起こしたんだ。これは以前の【大津ご法難】（佛立開導聖人物語第十一回参照）の時と全く同じやり方だね。

開導聖人 御年61歳（明治10年）のころの御真影

活気あふれる御講風景
さまざまな法難にあうも佛立講の信者は増えていった

明治五年（一八七二）六月十日、開導聖人五十六歳の時、京都府の役人によって開導聖人とお弟子、ご信者方が捕らえられ、この日から四十二日間も牢に入れられてしまうんだ。

そして、七月十二日に釈放（捕らえられている者を自由にすること）されたんだけど、宥清寺には戻れず本能寺（本門法華宗の五大本山の一つ）で謹慎（言葉や行動をひかえ、おとなしくしていること）させられることになったんだ。

謹慎中に数回の取り調べがあり、翌年の明治六年（一八七三）一月末、ようやく無罪となり一年二ヵ月ぶりに開導聖人は、宥清寺にお帰りになられご奉公を再開（再び始める）されたんだよ。

明治八年（一八七五）の開導聖人五十九歳の時、医薬（病気を治すための薬）を止めさせたとか、怪しげ（普通でない）な加持祈祷（病気・災難などを払うために行う祈り）をしたとして、何度か京都府や警察署の取り調べを受けたんだけど、すぐに疑いが晴れて釈放になるんだ。

明治十年（一八七七）の開導聖人六十一歳の時には、神官と僧侶の五十七人が京都府にまたウソの訴えを起こしたんだけれども、その場で釈放されるんだ。

法華経のお経文には、「御題目のご信心を弘める者には、必ず【難儀（法難）】あり」と説かれているんだけど、まさに開導聖人の身の上には、いろいろな【法難】が起こったんだね。

でも開導聖人は少しも恐れることなく、くじけることなく、お祖師さま（日蓮聖人）の御使いとして「何のこれしき」と、御題目を多くの人々にお弘め下さったんだ。本当に開導聖人は立派なお方だね。

京都府の牢での様子。明治5年6月、42日間入牢された「清風一代記略図」・御自画伝・扇全5巻212頁

ご着用の五条袈裟

開導聖人護持の御数珠